

2018 年香港日本語学習者背景調査

The 2018 Survey of Japanese Language Learners in Hong Kong

齋藤誠、梁安玉、劉礪志、李澤森、李夢娟
香港日本語教育研究会

要旨

2010 年から実施している香港の日本語学習者背景調査では、学習目的・動機（木山 2011、宇田川 2015、山下 2016、2018）、年少者調査（山下 2017）、日本語学習者減少の要因調査（宇田川 2013、2014）など実施してきたが、本調査では、JLPT 受験者を対象に香港の日本語学習者の学習上達実感度、学習スタイルを調査するとともに、独学者に見られる特徴の一端を明らかにすることを試みた。その結果、上達実感度では、受容能力の上達は、産出・やり取りよりも上達を実感していること、独学者は「聞く」以外の能力の上達実感度が全体より低いことが分かった。また、学習スタイルについては実用的で挑戦的な方法を好みながら、同時に規則性、論理的分析をする傾向も見られ、多様な学びのスタイルが共存していることが明らかになったが、独学者に顕著な特徴は見出されなかった。

キーワード：自己評価、上達実感度、学習スタイル、独学者

2018年香港日本語学習者背景調査

齋藤誠、梁安玉、劉礪志、李澤森、李夢娟

香港日本語教育研究会

1. はじめに

2015年時点の香港の日本語教育機関で学習する人数は22,613人（国際交流基金2015）であるが、国際交流基金・電通（2016）は、香港での日本語学習経験者の割合は人口の9.7%で、計算上35～52万人（2014年の人口統計）と推定している。この推計は、教育機関以外で学ぶ日本語学習者がかなり存在していることを示唆している。香港日本語教育研究会（以下、研究会）が香港・マカオで実施団体として年2回運営している日本語能力試験（以下、JLPT）には、日本語教育機関での学習者（以下、機関学習者）のみならず、独学者も多く受験に来る。香港で日本語を学ぶ大学生の学習者ビリーフ、学習スタイルを調査した板井（2000、2001、2002）は、香港の日本語教育は「伝統的な学習・教授法が行なわれている」（板井2001:81）が、学習者の学習スタイルは「すべての言葉や概念がわからなくてもコミュニケーションを楽しむ」が、一方「ものごとの細部にこだわり、全体像をつかむのが苦手」（板井2002:69）という相反する特徴を併せ持っていると分析している。グローバル化が進み、外国語学習の環境が急激に変化している現在、香港の日本語学習者の学習スタイルに変化はあるのだろうか。また、クラス活動は学習者の日本語力向上にどの程度貢献しているのだろうか。本稿では、JLPT受験者を対象に香港の日本語学習者の学習上達実感度、学習スタイルを調査するとともに、独学者に見られる特徴の一端を明らかにすることを試みた。

2. 先行研究

2.1 学習スタイル

学習スタイル理論ではKolb（1984）の学習理論「Experimental Learning Theory（以下、ELT）」が多く参考にされており、藤田（2002）は、これを基に日本人大学生を対象に学習スタイルの調査を行い、5つの因子に類型化した。ELTに基づき開発された学習スタイル調査票は「The Learning Style Inventory（以下、LSI）」（Kolb, 1999）、その問題点を修正して、HoneyとMunfordが作成した「Learning System Questionnaire（以下、LSQ）」（Honey & Munford, 1995）などがあるが、藤田（2002）は日本人学習者向けに内容を修正した調査票で調査した。

Kolb（1984）のELTは学習段階を4段階に分類している。まず初めに具体的に経験する「具体的経験」、経験を内省して観察する「内省的観察」、理論や抽象的概念の構築をする「抽象的概念化」、最後に実験を通して実証する「能動的実験」

である。藤田（2002）は LSI も LSQ もこれら 4 極が対極にあり、正負の関係にあるとしているが、日本人大学生を対象にした調査の結果「熟考」「論理」「実用」「挑戦」「秩序」の 5 つの因子が抽出され、互い正負ではなく、相関関係にあることを明らかにした。岡田（2012）では、前述 5 因子に「感覚」の因子を加え、6 類型に分類している。

2.2 香港における学習スタイル調査

香港の日本語学習者の学習スタイル研究については、板井（2002）がある。香港の学習者は「視覚型」（本やビデオなど視覚的手段を用いるとよく学べる）、「操作型」（プロジェクト、ゲーム、実験など教室を移動しながら学ぶのを好む）の傾向が強く、「聴覚型」（討論、ロールプレイ、講義など聞いたり話したりする活動）は低いとの結果を報告している。

板井（2001）で行った香港 4 大学の大学生を対象にした学習ストラテジーとビリーフ調査でも、同様の結果を明らかにし、香港の日本語学習者は「学習動機が個人的で高く、クラスで話すことにアレルギーは感じていない（板井 2001:92）」こと、伝統的教授法（例：文法学習）を比較的好むが、同時にクラス活動では教師に「コミュニケーション」で「多くのアクティビティを行うべきだ（板井 2001:92）」とされていると分析した。これらの調査は大学生を対象にしており、香港で最も割合の高い語学学校での学習者や独学者は対象になっていない。宇田川（2015）も香港日本語学習者（JLPT N3～5 受験者）のビリーフ調査を行い、香港の日本語学習者は「話す」ことに積極性を持っているなど、板井（2001）に近い結果を報告している。

瀬尾（2013）は民間日本語学校で学ぶ 10 代の日本語学習者への質的研究で、個々の学習者が従来の知識伝達型の教育方法よりも、主体的に学習活動に参加し、彼らがおかれている状況（アニメ・漫画・ゲーム・テレビ番組など身近にある日本語リソース）に依存した中で知識を獲得し、相互作用によって学習が行われている実態を明らかにしている。

香港における日本語学習者で、独学者を対象にした調査では、国際交流基金・電通（2016）にて調査対象に含まれている。これには日本語学習経験者のうち独学者の占める割合から、香港の人口に占める推定独習者人口（香港の人口の約 9.7%）は示されているが、学習経験、学習方法などは全体の学習経験者の数値のみで、独学者のデータは公表されていない。

3. 目的

本調査の目的は、以下の2点を明らかにすることである。

- 1) 香港の学習者は自分の日本語の上達について、技能別にどう感じているのか。学習環境により違いがあるのか。
- 2) 香港の日本語学習者の学習スタイルの傾向を明らかにする。また、独学者¹の特徴はあるのかどうか。

4. 調査方法・調査協力者について

4.1 調査方法

対象者：2018年6月、11月に研究会が実施した JLPT 応募者（N4、N5）を対象とした学習者調査に協力をいただいた方。

調査方法：調査協力者に質問用紙を配布し、記入したものを研究会担当者が回収した。回答形式は主に選択式（「その他」欄は自由記述形式）。質問用紙は中国語（繁体字）で作成したものを配布した。

集計方法：表計算ソフトにデータ入力した。なお、中国語で書かれた自由記述箇所は日本語に訳した。

4.2 調査協力者の基本情報

調査協力者は6月399人（N4 235人、N5 164人）、11月384人（N4 223人、N5 161人）の計783人である。年齢別の内訳は表1の通りである。今回の調査協力者は20～30歳代が多くを占めている。表2の職業を見ると、社会人が過半数を占め、高等教育機関の学生が3分の1強となっている。

表3日本語学習歴では、N4・N5協力者とも1年以上2年未満が最も多く、N4は次いで2年以上3年未満、N5は半年以上1年未満となっており、N4協力者は半年～3年未満、N5協力者は2年未満が多数を占めている。

¹ 本項における独学者とは、調査票で通っている教育機関に回答せず、「独学」にマークした協力者を指す。調査では複数回答を可としたので、教育機関に通いながら独学でも学習している人も多数いたが、5. 調査内容・結果での全体、機関学習者との比較では、教育機関に通わない人のみを独学者として抽出した。

表1 レベル別年齢

	N4				N5			
	6月	11月	計	%	6月	11月	計	%
a.11歳以下	1	0	1	0.2	1	0	1	0.3
b.12～17歳	18	14	32	7.0	9	5	14	4.3
c.18～22歳	52	44	96	21.0	31	38	69	21.2
d.23～29歳	93	77	170	37.1	52	59	111	34.2
e.30～39歳	51	57	108	23.6	42	37	79	24.3
f.40～49歳	16	18	34	7.4	20	9	29	8.9
g.50～59歳	4	10	14	3.1	7	8	15	4.6
h.60～69歳	0	3	3	0.7	1	4	5	1.5
i.70歳以上	0	0	0	0	1	0	1	0.3
不明	0	0	0	0	0	1	1	0.3
計	235	223	458		164	161	325	
総計	783							

表2 レベル別職業

	N4		N5		計	
	人	%	人	%	人	%
a.小・中・高生	37	8.0	17	5.2	54	6.9
b.短大（副学士 AD・HD）	29	6.3	25	7.7	54	6.9
c.大学生	121	26.4	78	24.0	199	25.4
d.大学院生（MA, Dr）	21	4.6	12	3.7	33	4.2
e.就労、会社員	239	52.2	179	55.1	418	53.4
f.年金生活者	7	1.5	7	2.2	14	1.8
g.その他	4	0.9	7	2.2	11	1.4

表3 レベル別日本語学習歴

	N4		N5		計	
	人	%	人	%	人	%
a.半年未満	32	7.0	49	15.1	79	10.1
b.半年～1年未満	71	15.5	100	30.8	171	21.8
c.1年～2年未満	205	44.6	151	46.7	356	45.5
d.2年～3年未満	107	23.4	20	6.2	127	16.2
e.3年～4年未満	20	4.4	0	0.0	20	25.6
f.3年～4年未満	10	2.2	1	0.3	11	14.0
g.5年以上	13	2.8	4	0.1	17	2.2

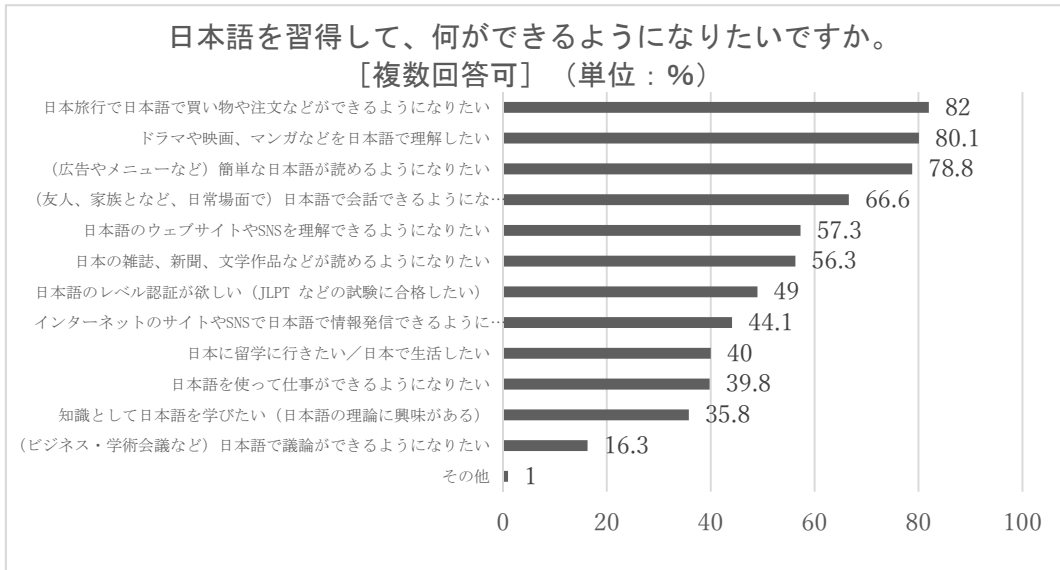
表4 学習環境（教育機関等）については、複数の教育機関に通っている人、機関と個人授業など、複数の場で学ぶ人もいと想定されるため、複数回答可とした。割合では、民間日本語学校で学習している人と、独学者の割合が高い。国際交流基金・電通（2016）では、独学のみで機関で学習していない学習者の割合が29.4%とあるが、本調査での同割合は22.7%である。

表4 レベル別学習環境（教育機関等）

	N4				N5			
	6月	11月	計	%	6月	11月	計	%
a.小学校	0	0	0	0	0	0	0	0
b.中・高校	2	0	2	0.4	2	1	3	0.9
c.副学士（AD/HD）	3	2	5	1.1	2	3	5	1.5
d.大学・大学院の主/副専攻	3	11	14	3.1	3	2	5	1.5
e.大学の選択科目	3	6	9	2.0	3	3	6	1.8
f.大学付属機関・社会人講座	20	20	40	8.7	10	21	31	9.5
g.語学学校（民間）	114	117	231	50.4	111	104	215	66.2
h.個人授業	20	16	36	7.9	9	4	13	4.0
i.独学（本で学習）	94	70	164	35.8	36	35	71	21.8
j.独学（ネットなどIT環境で学習）	59	57	116	25.3	21	22	43	13.2
k.通信教育	1	1	2	0.4	0	1	1	0.3
l.今は勉強していない	5	4	9	2.0	7	3	10	3.1
m.その他	2	0	2	0.4	1	1	2	0.6

日本語学習の目標を質問したところ、表5の通り上位には比較的短期間で達成できる目標が高い割合を占め、「留学・生活したい」「仕事がしたい」「議論ができるようになりたい」など比較的高度なレベルを目標にしている人は4割程度であることが分かった。これは木山他（2011）、宇田川他（2014）、山下他（2016、2018）の学習目的・意義を調査した結果と共通している。

表5 日本語学習の目標



5. 調査内容・結果

5.1 上達実感度

宇田川他（2015）は、香港の日本語学習者が「読む」「書く」「聴く」「会話」「単独で話す」のうち伸ばしたい日本語能力を調査したところ、「会話」が最も多く43%を占め、口頭コミュニケーションに関わる能力を伸ばしたい人が合計83.6%に上ったことを報告している。

今回の調査では、上達を実感しているかどうか、自己評価をしてもらった。表6-1によると、全体的にN5よりN4の方がわずかに上達を実感している傾向がわかる。瀬尾（2011）も日本語学習が初級のうちに困難さを抱え、レベルが上がるにつれて学習の喜びを感じている実態を明らかにしている。一方、技能別に見ると、「受容」能力（1、2）の実感度が全体平均で3.77、3.10と比較的実感している。特に「読解」能力の実感度が高く、標準偏差も0.76と偏りが少ない。それに対して、3、4の「産出」能力、5の「やりとり」スキルの実感度は「受容」に比べ低い結果となった。ただし、標準偏差が1に近いかそれ以上であり、上達を実感する人とそうでない人の差も大きいことが考えられる。

表 6-1 日本語能力上達の実感度²

	上達を実感したこと	N4 平均	N5 平均	全体	標準偏差
1	日本語の文章が読めるようになった	3.83	3.70	3.77	0.76
2	日本語の会話が聞けるようになった	3.12	3.07	3.10	0.96
3	日本語で文章が書けるようになった	2.56	2.50	2.54	1.06
4	日本語で言いたいことを伝えられるようになった	2.81	2.79	2.80	0.99
5	日本語で会話（やりとり）ができるようになった	2.62	2.54	2.59	1.06

次に、独学者（279人）と機関学習者³（533人）を比較したところ、2のみ独学者の方の上達実感度が高いという結果になった（表6-2参照）。ちなみに、独学者の学習方法も調査しており、「アニメ・動画・映画を視聴（75.5%）」、「（有料・無料の）eラーニング講座・コンテンツで学ぶ」（49.6%）、「音楽を聴く（48.6%）」、「読み書き中心」（37.1%）、「（インターネット・現実社会での）会話」（36.0%）の順に多く、耳から学ぶ方法を多数取り入れていることがわかった。なお、チャットなど SNS を日本語学習に利用している人⁴は独学者の14%だったが、全体でも14%と割合は変わらなかった。

表 6-2 独学者と機関学習者の日本語能力上達の実感度比較

	上達を実感したこと	独学者	機関学習者
1	日本語の文章が読めるようになった	3.58	3.81
2	日本語の会話が聞けるようになった	3.14	3.09
3	日本語で文章が書けるようになった	2.10	2.61
4	日本語で言いたいことを伝えられるようになった	2.60	2.83
5	日本語で会話（やりとり）ができるようになった	2.57	2.58

² 次の選択肢から当てはまるものを1つ回答してもらった。5:非常によく実感する 4:実感する 3:多少実感する 2:どちらかというところあまり実感しない 1:実感しない 0:全く実感しない

³ 表4のa~g回答者を「機関学習者」とした。複数回答している人がいるため、総数は合致しない。

⁴ 例えば村上（2018）は、独学者が外国語学習に SNS を活用している事例を紹介している。

5.2 香港における日本語学習者の学習スタイル

質問項目と学習スタイルの分類型は、藤田（2002）及び岡田（2011）に基づき、香港の日本語学習者への調査に適していると思われる質問を選択した。また、香港の学習者像を調査するため、クラス活動の好みを調査する項目を追加した。それは、教師の説明を聞き、受け身型の授業を好む「7座学志向型」と、学習者が主体的、積極的にクラス活動に関与することを好む「8クラス参加型」の2類型である。本調査では、各項目について、[5：非常によく当てはまる、4：当てはまる、3：多少当てはまる、2：どちらかというところあまり当てはまらない、1：当てはまらない、0：全く当てはまらない]の段階から1つ選びを回答してもらった。

表7 学習スタイル回答の平均値

No.		N4	N5	全体	標準偏差
1. 実用型					
1	外国語学習は実用的であることを一番大切にする	3.95	3.94	3.96	0.88
9	自分が日本語でコミュニケーションしているところを想像する	3.83	3.75	3.81	0.96
19	実際に使える状況がすぐに思い浮かべられる	3.26	3.35	3.30	0.95
21	方法がどうであれ、課題を達成することを大切にする	3.56	3.60	3.56	1.08
31	実際に使って自然に身につけていく	3.91	3.86	3.91	0.81
36	新しいことを勉強したら、実際にどのように使うのかを考える	3.72	3.74	3.73	0.87
平均値		3.71	3.71	3.71	
2. 挑戦型					
4	効果的な方法だと思ったら、すぐにそれを試してみる	3.91	3.87	3.90	0.78
7	間違いを気にしないで話したり書いたりする	3.61	3.52	3.60	1.03
13	必要な情報を教師、友人、本などからできるだけ集める	3.63	3.68	3.63	0.95
14	今までとは違う新しいことに挑戦する	3.49	3.52	3.50	0.92

2018年香港日本語学習者背景調査

18	うまくいくかどうかわからなくても、 いろいろな方法を試す	3.47	3.63	3.49	0.86
20	慣れない方法でも柔軟に対応できる	2.88	2.98	2.90	0.94
28	思いついたことは、深く考える前に 言葉に出す	2.85	2.84	2.88	1.07
44	新しい挑戦的な活動や教材の方が 好きだ	3.63	3.73	3.66	0.93
平均値		3.43	3.47	3.44	
3. 感覚型					
2	いろいろ考えるよりも直感を 一番大切にする	3.15	3.15	3.20	1.08
10	細かいことがわからなくても、 全体が大きくつかめる	3.68	3.65	3.68	0.83
24	後で役に立つかどうかよりも、 今楽しいことを大切にする	3.98	3.97	3.97	0.99
29	課題をする際、初めに手順を 決めずにその場その場で対応する	3.00	2.90	2.98	1.17
32	決まった言い方は、分析せずに そのまま覚えてしまう	3.28	3.20	3.31	1.15
35	詳しい説明よりも、要点を抑えた 説明を求める	3.00	3.09	3.07	1.07
平均値		3.35	3.33	3.37	
4. 熟考型					
3	課題（作文や発表）をするときは、 準備に時間をかける	3.83	3.71	3.79	0.89
16	課題をする際、どのような結果に なるのか考えてから始める	2.78	2.88	2.81	1.01
26	目標を立てて意欲的に取り組む	3.25	3.38	3.29	0.99
34	自分でやってみるよりも、他の人が やっているのを見ている	3.22	3.33	3.30	1.00
37	課題を始める前に、どのような 手順でするかを決める	2.89	2.98	2.90	1.13
38	いろいろと考えたほうが良いと思う ので、結論は時間をかけて慎重に出す	3.35	3.40	3.34	0.99

39	目標に向かって、一步一步段階的に進めていく	3.69	3.72	3.68	0.89
平均値		3.29	3.34	3.30	
5. 論理型					
6	論理的に正しいことを一番大切にする	3.45	3.58	3.49	0.91
8	1つの正しい答えを求める	4.01	3.91	3.96	0.85
12	論理的に納得するまで考える	3.55	3.33	3.46	0.93
15	1つ1つ確実に理解していく	3.78	3.74	3.77	0.81
17	直感に頼るよりも、細かく分析して考える	3.04	3.23	3.08	1.03
27	文法の規則に従って考える	3.51	3.49	3.50	0.90
30	あいまいな点があると、なかなか先に進めない	3.20	3.14	3.21	1.09
平均値		3.50	3.49	3.49	
6. 秩序型					
5	自分で規則を見つけながら学習するのが好きだ	3.75	3.62	3.71	0.89
11	具体例から規則を見つけ出そうとする	3.93	3.89	3.90	0.77
22	新しく学んだことを体系的に整理する	3.29	3.40	3.33	0.99
25	多くの具体例を集めて考える	3.12	3.19	3.13	0.96
33	規則がわかったら、他の場合にも適用する	3.52	3.47	3.51	0.97
平均値		3.52	3.51	3.52	
7. 座学指向型					
40	教師が主に話し、学習者は当てられたときだけ話すスタイルがいい	2.43	2.67	2.53	1.29
41	会話より文法を中心に勉強したほうが、効果が高い	2.65	2.84	2.69	1.10
43	クラスの交流より、試験対策などの方が合っている	2.68	2.86	2.75	1.16
平均値		2.59	2.79	2.66	

8. クラス参加型					
42	クラスメートとのペアワークやロールプレイなど、クラス活動が多いほうがいい	3.53	3.53	3.53	1.07
45	アクティビティが多い、参加型のクラスが好きだ	3.74	3.69	3.73	0.99
平均値		3.63	3.61	3.63	

5.2.1 全体の傾向

1～6の6類型に大きな偏りがなく、突出した分類型はなかった。最も好まれているスタイルは「実用型」(3.71)で、次いで「秩序型」「論理型」「挑戦型」の順に続き、「感覚型」「熟考型」は比較的低かったが、その差は小さく、多様な日本語学習者像が見られる。

「外国語学習は実用的であることを一番大切にする」(3.96)、「自分が日本語でコミュニケーションしているところを想像する」(3.81)、「実際に使って自然に身につけていく(3.91)」、「効果的な方法だと思ったら、すぐにそれを試してみる」(3.90)、「後で役に立つかどうかよりも、今楽しいことを大切にする」(3.97)など、実践的、挑戦的な志向がある一方、「課題(作文や発表)をするときは、準備に時間をかける」(3.79)「1つの正しい答えを求める」(3.96)「1つ1つ確実に理解していく」(3.77)、「具体例から規則を見つけ出そうとする」(3.90)といった数値の高い項目からは、慎重かつ正確さを重視した学習を好む傾向も見られる。板井(2002)が「すべての言葉や概念がわからなくてもコミュニケーションを楽しむ」一方で、「ものごとの細部にこだわり、全体像をつかむのが苦手(板井2002:69)」であり相反する学習スタイルを持っていると指摘している点と共通する。

また、7座学指向型と8クラス参加型を比較すると、8の方が高い数値となった。ただし7は標準偏差の値が大きく、回答の値にばらつきがあった。

5.2.2 独学者の学習スタイルの特徴

独学者群のみを抽出して全体平均と比較したところ、全体的には顕著な相違は見られなかった。しかし、全体平均との比較で0.1以上差がある項目を抽出すると、表8の通り12項目が見つかった。12、17は「熟考型」で独学者のほうが低かった項目である。また、10、28、29の「挑戦型」「感覚型」の一部に高い項目があった。しかし、これらは各分類型の一部であり、全体の傾向とは言えない。なお、5、10、33、36は自律学習に関連した項目でもある。

表 8 独習者群の学習スタイルの特徴

独学者群平均の方が 0.1 以上低かった項目			
		全体平均	独学者平均
1	外国語学習は実用的であることを一番大切にする	4.96	4.83
12	論理的に納得するまで考える	4.46	4.29
17	直感に頼るよりも、細かく分析して考える	4.08	3.93
21	方法がどうであれ、課題を達成することを大切にする	4.56	4.39
35	詳しい説明よりも、要点を抑えた説明を求める	4.07	3.93
40	教師が主に話し、学習者は当てられたときだけ話すスタイルがいい	3.53	3.25
独学者群平均の方が 0.1 以上高かった項目			
		全体平均	独学者平均
5	自分で規則を見つけながら学習するのが好きだ	4.71	4.81
10	細かいことがわからなくても、全体が大きくつかめる	4.68	4.83
28	思いついたことは、深く考える前に言葉に出す	3.88	3.99
29	課題をする際、初めに手順を決めずにその場で対応する	3.98	4.09
33	規則がわかったら、他の場合にも適用する	4.51	4.62
36	新しいことを勉強したら、実際にどのように使うのかを考える	4.73	4.83

6. まとめ

本調査で明らかになったことでは、上達実感度では、香港の N4、N5 受験レベルの日本語学習者は受容能力の上達は、産出・やり取りよりも上達を実感していること、独学者は「聞く」以外の能力の上達実感度が全体より低いことが分かった。また、学習スタイルについては実用的で挑戦的な方法を好みながら、同時に規則性、論理的分析をする傾向が見られ、クラス活動では参加型授業を好む学習者が多いと思われる。また、機関学習者と独学者の間に顕著な相違点は見当たらず、多様な学習スタイルが併存していると思われる。

今後、今回の結果を基に再検討し、より明確な理論・仮説に基づいた香港の日本語学習者調査を実施したいと考えている。

参考文献

- Honey, P. & Mumford, A. (1995). *The learning styles questionnaire: Facilitator guide* (3rd ed.). King of Prussia, PA: Organization Design and Development
- Kolb, D.A. (1984). *Experiential Learning*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall
- Kolb, D.A. (1999). *Learning Style Inventory III*. Boston, MA: Hay Group
- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対するBELIEFS について—香港4大学でのアンケート調査から—」『日本語教育』104号, 69-78
- 板井美佐 (2001) 「香港における中国人学習者の日本語学習に対する動機(BF)、学習ST 及び学習活動上の好みに関する調査—香港4大学機関の調査から—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第16号, 83-104
- 板井美佐 (2002) 「香港における中国人学習者の学習スタイルに関する調査」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第17号, 61-79
- 宇田川 洋子・李夢娟・李澤森・劉礪志 (2013) 「香港の日本語能力試験受験者減少の要因を探る—アンケート調査実施報告—」『日本學刊』第16号, 233-246
- 宇田川 洋子・李夢娟・李澤森・劉礪志 (2014) 「香港の日本語学習者減少の要因—調査報告—」『日本學刊』第17号, 107-120
- 宇田川 洋子・梁安玉・李澤森・侯清儀・李夢娟 (2015) 「香港の日本語学習者における言語学習ビリーフ—2014年香港日本語学習者背景調査報告—」『日本學刊』第18号, 121-133
- 岡田有加 (2011) 「学習スタイル—英語を学ぶ大学生を対象として—」『東京女子大学言語文化研究』20, 30-43
- 木山登茂子・中野貴子、周宏陽・上田早苗・望月貴子・蘇凱達・青山玲二郎 (2011) 「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本學刊』第14号, 176-195
- 瀬尾匡輝 (2011) 「香港の日本語生涯学習者の動機付けの変化—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る—」『日本學刊』第14号, 16-39
- 瀬尾匡輝 (2013) 「香港の民間語学学校で日本語を学習する高校生達の学び—構成主義の視点から—」『日本學刊』第16号, 92-103
- 藤田裕子 (2002) 「日本人大学生の外国語学習スタイルとKolbのExperiential Learning Theory」『JALT journal』Vol.24, No.2, pp.167-181
- 村上吉文 (2018) 『もう学校も先生もいらない!? SNS で外国語をマスターする《冒険者メソッド》』ココ出版
- 山下直子・梁安玉・劉礪志・李澤森・侯清儀・李夢娟 (2016) 「2015年香港日本語学習者背景調査」『日本學刊』第19号, 185-197
- 山下直子・梁安玉・劉礪志・李澤森・李夢娟 (2017) 「2016年香港の日本語学習者背景調査—年少者と成人の学習動機—」『日本學刊』第20号, 118-124
- 山下直子・梁安玉・劉礪志・李澤森・李夢娟 (2018) 「2017年香港の日本語学習者背景調査」『日本學刊』第21号, 182-192
- 国際交流基金 (2015) 『2015年度日本語教育機関調査』
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf
(2019年3月14日最終閲覧)
- 国際交流基金・電通 (2016) 『台湾・香港・韓国 日本語学習者調査結果』
https://drive.google.com/file/d/0B_YYwiD-_16lblRNVEIULUpwS28/view
(2019年3月14日最終閲覧)